

急に暖かくなり一気に桜が開花したかと思ったらすぐに雨、今年の大阪の満開は短いようです。皆様、お元気で過ごしてはいかがでしょうか。

昨年春先に vol.14 を発行してからかなりの月日が経過してしまいました。今般会員よりがん発覚後 3 年を経過して振り返ってみた気持ちを記した文章が寄せられましたので、以前に代表（辻）が他団体に寄稿したものと合わせ、vol.15 はがんを振り返って書いた文章 2 編をお届けいたします。



## がんと共に社会と共に生きる（働く世代のがん患者の妻の立場から）

文：ぎんなん K.O.(2017/4/9)

夫が前立腺がんだと判ったのは3年前の2014年1月のことでした。当時夫は50歳、尿意があるにもかかわらず尿が全くでなくなり、2時間程度で排尿できる程度に戻ったもののこれはおかしいとすぐに総合病院の泌尿器科を受診しました。受診の結果は前立腺がんのステージD1、これは他のがんでいうとステージ4に当たります。夫のがんは前立腺周辺への浸潤と骨盤内のリンパ節への転移があり、4以下が基準値とされている腫瘍マーカー（PSA）の値が226と非常に高く、悪性度の指標であるグリソンスコアも10段階の9とかなり進行しているものでした。そのためもう手術はできずこれからする治療はがんを治す治療ではなくがんをなるべく抑えていく治療になるという説明を受けました。

夫は驚いていたようではありましたが、少しも落ち込んだりすることはなく治療に前向きに取り組んでいこうとしていました。しかし、私の方は「早ければ2年、でも夢も希望もないわけではない。中には10年くらい生きる人もいますから」という主治医の言葉が頭から離れず、なかなか夫のがんを受け入れることができませんでした。私は何もなかったかのように眠っている夫の横で、この人がこれから苦しい治療の末に死んでいくという先行きしか思い描けず、その恐怖でほとんど眠れなくなってしまいました。夫が会社した後も家に一人していると耐えがたい不安に襲われ、買い物に出かけても年配の男性を見ては夫はもうおじいさんにもなれないと涙ぐむ。私を元気づけようと「今までも幸せやったし今もすごい幸せや、だから大丈夫やで」そう言ってほほ笑む夫の姿を見ても涙があふれました。24時間がんに支配され希望が見えず、自分で自分の感情をコントロールできない日々が続きました。本来支えるべき私の方が病人になってしまったのです。

そんなとき、既に実家を離れて大学生を送っていた2人の子供たちがすぐにそれぞれの方法で私たちを助けようとしてくれたのは本当にありがたいことでした。娘はすぐに帰省してくれ私を直接叱咤激励。息子はふさぎ込んでいる私に「患者本人と2人きりで向き合っているのはしんどいだろう、がん患者の配偶者はうつ病になるリスクが高いらしいからすぐにでも患者会に行った方がいい」とアドバイスをくれました。子供たちの助言を受け夫や子供のためにも早く自分自身を立て直さねばと、わらにもすすがる思いで患者会を探し患者会「ぎんなん」と出会いました。

そこでは患者本人、その家族、遺族など様々な状況や立場の人がそれぞれの思いを胸に、泣いている私に寄り添い大丈夫だよと力強くうなずいてくれました。がんを乗り越え、また乗り越えようと笑顔で励ましてくれる人を目の前にし、私にもこんなふうに笑える日がきっと来る、しっかりしなければと目が覚める思いでした。その光景に最も希望を感じ、救われ、私はだんだんと日常を取り戻していきました。病気が判ってから明く前向きな夫や懸命にアドバイスをくれる子供たちを目の前にしても希望が持てずにいた私にとって、それは不思議なくらい驚きの体験でした。自分の考えが変われば希望は見えてくる、どこにあるのだろうと必死に探していた希望は実は自分の中にあったのだと気づきました。ぎんなんの皆さんも私と同じように自分の中に希望を見つけがんを乗り越えてこられたのだと思います。

一方夫の仕事の方はそううまく事は運びませんでした。がんであることが判ってすぐ業務に支障を来してはいけないと会社に報告しましたが、何の説明もなく2週間後には役職がなくなり2か月後には全く仕事を干された状況になってしまいました。不穏な空気を感じ「通常の業務に支障なし」という主治医の診断書を提出しましたが、何の意味もありませんでした。当初はまだ病状がどうなっていくのか全く判らず、会社に対して抗議するのは難しい状況でした。死んでいく人間というレッテルを貼られ、所属しているコミュニティから切り離されていくような大きな疎外感に襲われました。

その後夫はホルモン治療を3か月続けた後、放射線治療に入りました。この放射線治療は治療自体10分程度のもので2か月くらいの間毎日通院しなければなりません。会社からは病欠にするよう言われましたが、交渉の末2時間遅れで入社し2時間残業することが認められました。しかし、相手が悪意を持っている中、時差出勤を認めてもらうのはかなり大変なことでした。

通常、放射線治療はなるべくピンポイントに当たるよう行いますが、夫の場合は浸潤も転移もあったため骨盤部の広範囲に照射しています。そのためか膀胱や腸への副作用に加え腰から脚にかけての痛みが出ました。夫は自分で車を運転することが難しくなり、私が運転する車の後部座席に寝ころんだ状態で通院し、治療した後毎日2時間遅れで入社していました。あの状態でよく会社に行けるなど感心しましたが、会社に対する意地もあったので、2か月間会社を休むことはありませんでした。

夫は2年間の全く仕事がなかった時を経て今は違う部署に移っています。未だに仕事はわずかなようですが、以前に比べ環境は幾分ましなようです。しかし、夫にとってこの入社しても仕事のない状況は自分の病気のことよりもはるかにきついことのようにです。「がん患者であっても働ける間は普通に働かせてほしい」ただそれだけのことなのにと、毎日会社へ行く夫を見送りながらやるせない思いがこみ上げてきます。

現在夫はホルモン治療を継続して行っています。いったん0.00まで下がったがんのマーカーは少し上昇に転じてきましたが、今のところがんをうまくコントロールできているようです。多くの副作用や後遺症に悩まされていますが、友人や息子と自転車で「琵琶一」「淡一」「しまなみ」へと出かけたり、(大学の工学部を卒業しているのですが)新たに通信教育部の文系学科に入学したりと「今をしっかりと生きる」をモットーに病気が判る以前よりも真剣に積極的に生きています。私も夫が病気になるまで判らなかった感情や多くの気づき、そうでなければ出会わなかったであろう人たちとの出会いを大切にしながらこれからも夫と一緒に今をしっかりと生きていこうと思います。

まだまだがんには根深い偏見があるように思います。告知を受けたとたん夫を失ってしまったような気持ちになってしまったことは私自身ががんに対して持っていた偏見だったのだと思います。ま

た、会社の夫に対する対応もその一つでしょう。医療の進歩に伴いがんは多くの方が長く付き合っていかなければならない慢性病となってきています。がんに対する偏見がなくなり、がん患者ががんと共に社会の中で普通に生きていけるようになることを心から願っています。



## 哲学の道顛末記

文：ぎんなん代表 辻恵美子 (2014/9/27)

人の一生には幾つかの転機がある。

60歳を迎える私にも一つの大きな転機があった。

私が乳がんの告知を受けたのは2003年1月。2月には左乳房全摘術を受けていた。ステージ（がんの進行度）は4、末期がんの部類に入る。当時59歳だった私はその年還暦を迎える予定だった。

主人と私は大の京都好きである。主人の仕事の関係で大阪に移り住んだ私達は週末にはよく二人で京都の古い街並みを歩いた。いつか住んでみたいと思う場所がいくつかあり、哲学の道もその一つだった。

乳がん発覚の前年、2002年春には哲学の道にある古い家屋が貸しに出されているのを知り、そこを借りることにした。週末はそこを根城に京都市内をマウンテンバイクで走り回る姿を思い描き、期待に胸をふくらませた。家の前を流れる疏水と美しい桜並木に感動し、私は嬉々として古家を整えるのに没頭した。

どうにか住める程度に手を入れ、「さあいよいよ哲学の道暮らしが始まるぞ」と思った矢先、主人が「網膜剥離」という目の病にかかり、手術のため大阪の病院に入院することとなる。どうやら古い家屋の低い鴨居に頭を強くぶつけたのが原因のようだ。近眼の人は頭を強く打ったりするとかかりやすいと聞いている。剥離が目の下の部分からの場合には比較的余裕があるようだが、主人の場合は上からの剥離のため緊急を要した。失明するからだ。

せっかく手を入れたのに京都の家どころの話ではなくなり、入院は一カ月におよんだ。この病気は手術した後が大変で、術後顔を長期間下に向けていなければ網膜がくっつかないため、下を向いた状態の生活が続いた。当分京都の家住まいはお預けとなった。

5か月が過ぎ、2003年正月、主人も通常の暮らしができるようになり、念願の京都暮らしが実現した。いえ、実際にはしたかに見えただけだったのだが。

2003年1月、前年暮れから体調を崩していた私は左脇の下の痛みと卵型のゆるやかな膨らみに気が付いた。「風邪にはしておかしいな」と思い、主治医に相談すると、大阪市立大学医学部附属病院を紹介される。初めての受診日、緊張していた私に、担当の教授が「お久しぶりです」と笑顔を向けた。名前に聞き覚えはあったのだが、「やはり〇〇先生」でしたか。先生が若いころ、私のマンションの真下に住んでおられたのだ。緊張がほぐれほつしたのを覚えている。しかし検査の結果は惨憺たるものだった。

乳房の中1.5センチ、脇の下2センチ、鎖骨上2センチ。骨シンチ（体内に微量の放射能を静脈注射して数時間後にその集積をみて炎症の有無を調べる）の結果である。

当時鎖骨上転移は遠隔転移とみなされ、ステージ4の末期がんと診断された。リンパにどの位転移があるかは開けてみないとわからないと言われ、先生の申し訳なさそうな顔に余命の短さを思った。私は泣いたりして取り乱すことはなかったが、どうやって家に辿りついたかは未だに思い出せないでいる。その記憶は完全に欠落したままだ。

がんと診断されてからはベルトコンベアーに載せられたかのように手術・抗がん剤投与と流され41日間を病院で過ごすこととなった。まさに命と向き合った時間といえる。

ただ、今振り返ってみると、命と向き合った日々の筈なのにそれ程の悲壮感はなかったように思う。思うように動かない体、抜け落ちる髪、抗がん剤による脱力感でうつらうつらしていたことが多かったが、意識はしっかりしていたし、病棟内を歩いてもいた。沢山の友達も来てくれた。目が覚めると前に誰かの顔があった。一人でいることが少なかったからなのかもしれない。

悲壮感こそなかったが、自分の余命のことはいつも頭の隅にあり、残された月日をどう過ごすか考えを巡らせていた。そしていつも行きつく残念なことが二つあった。

一つはまだ生まれたばかりの孫の成長は見られないということ。もう一つは楽しかった中国への旅はもうできないということ。

「がんになってしまったことは仕方がない。長く生きられないのも仕方がない。自分にはどうすることもできないのだから。」そう自分に言い聞かせながらも往生際の悪い自分がいた。

話は少し前に戻るが、私のがんの告知を受ける4カ月前、2002年9月、主人が網膜剥離で入院中に長男夫婦に男の子が生まれた。私にとっては初孫にあたる。

私はがんに罹患する前、友人のSさんや彼女のお友達と共によく中国へ気功を受ける旅に出かけた。その年の春も気功を受けに上海へ出かけた。気功師は中国でも有名な先生で、私は彼の御弟子さんから気功を受けている最中に臨死体験を経験した。覚醒する間に「僕よ・ぼくよ」という子供の声が聞こえ、私は現実には引き戻された。そしてその秋、男の子が誕生した。そんな経緯もあって孫の誕生を心待ちにしていたのだ。自分の孫が可愛くないおばあちゃんはいない。

退院してきた私の腕の中で髪の毛のない私の顔をじっとみつめる柔らかい円らな目。小学校までとは言わない、せめて幼稚園に入る時まででいい、見届けたいものだとは何度思ったことか。その都度、孫の顔を見られただけでも幸せじゃないか。と自分に言い聞かせた。そしてこの思いは、こののち私のがんの患者会を立ち上げた時、共に闘う仲間達を通していやというほどみつめることになる。

長くは生きられないという思いを胸に通院での抗がん剤投与がはじまり、点滴を受けた後京都に滞在する生活がはじまった。制吐剤のおかげでだるさはあっても吐くほどのこともなく、春の盛りに退院した私は家から見える美しい桜並木や夕靄に霞む山々を眺めて過ごすことが多くなった。そして大半の時間を自分の歩んできた人生の思い出に費やした。

そして哲学の道のこの家は、余命の短い私を癒すためにうってつけの家となっていた。

思い出の中にSさん達と訪れた中国の辺境の旅がよく登場した。真っ黒になりながら山肌にへばりつくようにして暮らす人々が、山の斜面に舗装道路を作っていた。車が通る度に彼らは砂埃にまみれる。中国は人口が多く、何を作るにも人海戦術だ。その中には幼い子供たちの姿もあった。まるで人生の縮図を見るようだと言っていた。60歳まで豊かに生きられた自分を重ねてみる。十分生きたという思いで胸が熱くなった。達観できたと感じていた。

死に行く心の準備は整った。後は残された子供や孫への思い出作りに精をだそうと決めた。

初夏が訪れ、哲学の道も新緑の美しい季節になっていた。相変わらず通院の抗がん剤治療は続いていた。髪の毛も坊主のまま、胸の傷も癒えていなかったし、治療途中の怪我等のハプニングもあったりしたが、時の経過とともにがんに慣れていっている自分に気がついた。まだ約束の6カ月は来ていないけれど、「本当にこのまま死ぬのだろうか」と考えたりもした。

夏が来て義姉からハワイへ行かないかと誘われた。「抗がん剤やっている人間にハワイだなんて」とは考えなかった。周りの人はみんな知っていたのだから。私の命が短いことを。

先生に相談すると渋い返事が返ってきた。でも私は行くことに決めた。なぜなら短い余命なのに注射なんかのために止めるのはもっともったいないではないか。先生も私の性格を知っているのか、「機内が問題。マスクをして風邪をひかないよう」。抗がん剤で白血球が減っていると風邪をひいた場合肺炎を併発する可能性が高いからだ。がん患者の死因の多くは急性肺炎である。

ハワイではドクターから日焼けに注意するよう言われていた。抗がん剤を受けているので副作用が強くなるからである。陽が落ちて夕暮れの海にオッパイが片方無い身体と鬘で

ゆっくり身を沈める。夕焼けに染まった異国の海を眺めながら、今ここにある自分を神に感謝した。神様の最後のプレゼント？それと同時に「このまま死ぬ？死んでいいの？」私の内なる声がささやい

た。

日本に帰ってきてひどい風邪をひいた。けれど肺炎までには至らなかった。抗がん剤は9月一杯までは続く。夏の京都は蒸し暑かったけれど可愛い孫に会えるのと、二階の畳の部屋に横になり、ガラス窓越しに空を見ながら寝るのが気に入って、通院以外は哲学の道の家で過ごした。横になりながらよく「千の風になって」を聞いた。その時期に読んだアメリカの小説に、ある老婆が二人、友人のお墓を訪ねるが、墓地が広くてなかなか見つからない。疲れ果てて近くにあったベンチに腰掛ける。なんとそのベンチが探していた友人のお墓だったのだ。「歩き疲れたらどうぞ腰かけて休んでいて下さい。」と墓標に刻まれていた。

何と粋で素敵なお墓だろう！私もこんなお墓を作りたい等と考えた。

9月に入った。抗がん剤は続いていたが苦にならなくなっていた。死を覚悟したせいか

気持ちもさばさばして生活を楽しむ余裕さえ出てきた。そんなある日ある小児がんのドクターの話聞いた。「生きてくても生きられない。死にたくないのに死んでいかねばならない沢山の子供たちを看取ってきました。簡単に死んでいいなんて言えない。与えられた命をどんなに辛くてもまっとうしなければ申し訳ない」と涙を流しながら訴えた。

その夜、ハワイでの私の内なる声がまたささやいた。「まだ生きているのに死んでいいって言える？本当に悔いはない？」

数日後気が変わった。約束の6カ月を過ぎてもこんなに元気。たとえもう少し苦しくなってもまだ十分使える身体ではないか。這いずって生きるまでまだ何か出来るのでは・・・

この体で私の能力でできること。最後の最後誰かの役に立てそうなこと。私はステージ4のがん患者。この体験を生かそう。市大病院には患者会がない。「患者会を作ろう。そしてがんと共に助け合いながら生きていこう」

その年、ハーセプチンという新薬が厚労省の審査をパスして保険適用になった。末期がんの患者のための分子標的薬だ。悪いがんだけ攻撃するため良い細胞は傷つかない。但しHer2強陽性の人にしか適合しない。このタイプの人には5年生存率3パーセントなのだが、合えば今まで死んでいった患者が助かることになる。心毒性があるためアメリカでは死亡例もあったが、日本では出なかったので使うことになった。本来は高い薬だったが、治験の効果が著しかったため、厚労省が6月に保険適用を認めていた。市大病院では未だ体験者はなく、主治医も消極的だったが、娘の熱意に負けて投与することに決まった。どうせ死ぬと思っていたので何かあっても悔いはないと思い、一週間入院して心電図付きで投与された。初日は熱がでて起きていられず、いつ寝たのかも覚えていなかった。2日目は実験的に何もつけず投与した。何も起こらなかった。

そしてこの薬は乳がんの末期がん患者の大切な友となった。

この後、大阪市大病院内で患者会を起し、今も活動を続けている。今年で11年目に入ったが、その間たくさんの仲間達を見送ってきた。その仲間達のためにもまだまだ頑張らなければと思っている。



いかがでしたでしょうか？ 次回、できるだけ早く vol.16 を発行したいと思います。

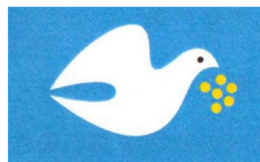
大阪市立大学医学部附属病院

がん患者サポートの会 『 ぎんなん 』

Cancer Patient Support Club 『 GIN NAN 』

---

**Mail:** [info@gin-nan.info](mailto:info@gin-nan.info)  
**URL:** <http://www.gin-nan.info/>  
**FAX:** 020-4664-5864



毎週木曜日 13:00～16:30

大阪市立大学医学部附属病院1Fでミニ患者会開催しています